
イブラーヒーム・ミュテフェッリカの人と業績

—オスマン・トルコ語による 金属活字印刷事業を中心に—

白岩 一彦

はじめに

1. 18世紀のオスマン帝国とヨーロッパ情勢
2. イブラーヒーム・ミュテフェッリカの前半生—そのイスラーム改宗に至る軌跡—
3. オスマン帝国の一官僚としてのイブラーヒーム・ミュテフェッリカ
4. オスマン帝国初の金属活字印刷所設置の公認に至るまで—皇帝、総理大臣、宗務長官との折衝—
5. ミュテフェッリカ金属活字印刷所の活動と発行書目
6. イブラーヒーム・ミュテフェッリカの死とミュテフェッリカ金属活字印刷所の廃止
7. ミュテフェッリカ版の文化史的意義

おわりに

脚注

地図

ミュテフェッリカ関係年表

参考文献

はじめに

トルコにおいて、またイスラーム世界一般において、イスラーム教徒が現地語文献を金属活字により印刷・出版したのは、イブラーヒーム・ミュテフェツリカのいわゆるミュテフェツリカ版 17 点を以ってその嚆矢とする。このミュテフェツリカ版は、オスマン帝国治下のイスタンブルにおいて、1729 年から 1742 年まで刊行された。このミュテフェツリカ版は、それまでヨーロッパで何度か印刷・出版された、どことなくぎこちないアラビア文字の出版物とは全く異なり、イスラーム写本の長い伝統を上手に生かした、美しい仕上がりの活字本であり、刊行と同時に、ヨーロッパでも評判となった。早くも 1731 年に、それまでに刊行されたミュテフェツリカ版のリストがオランダの新聞に掲載され、¹⁾ 1735 年には既刊分一揃いがオスマン帝国と友好関係にあったスウェーデンに送られている。²⁾ また、1741 年 1 月 14 日付けのフランス官報にもイスタンブルで刊行された図書についての記事が掲載されており、³⁾ オスマン・トルコにおける金属活字印刷の開始は、世にあまねく知られるようになった。

こうして世の注目を集めたミュテフェツリカ版誕生の立役者であるイブラーヒーム・ミュテフェツリカとは一体どんな人物であり、出版も含めて彼のした仕事はどんなものであったのだろうか。北米で初めてミュテフェツリカ版全 17 点の正確な解題書誌を発表したウィリアム・J・ワトソンは、イブラーヒーム・ミュテフェツリカの人となりについて、次のように評している。⁴⁾

「出版所を設立したイブラーヒーム・ミュテフェツリカは多面的な人物であった。地理学者・地図製作者であり、外交官・行政官であり、著者・編集者・翻訳者であり、印刷工・タイプ作成工であり、宗教学者、使節、兵士、小冊子宣伝者、改革者であった。とはいうものの、彼の伝記[の構成部分—引用者注—]の多くは不明なままである。」

本稿では、こうした多面的な人物であるイブラーヒーム・ミュテフェツリカの生涯と業績について、彼の出版事業に焦点を当てながら述べてみたい。

1. 18 世紀のオスマン帝国とヨーロッパ情勢

オスマン帝国は、13 世紀末にモンゴル支配下の小アジアに誕生した、遊牧トルコ族を主体とするイスラーム国家で、始めは小さな君侯国であったが、ビザンティン帝国と境界を接しているという地の利を生かして次第に領土を拡大し、1453 年にはコンスタンティノープルを攻略してビザンティン帝国を滅ぼ

した。それ以後オスマン帝国はアジア、ヨーロッパ、アフリカに領土を広げ、1529年にはハプスブルク帝国の首都ウィーンを包囲攻撃するまでになった。⁶⁾ こうした飛躍的な発展拡大を遂げたオスマン帝国は、ロンドン大学のヘイウッド博士の言葉を借りれば、「膨張に向けて調整がなされている軍事機械 (a military machine geared for expansion)」であった。⁷⁾

しかし、1683年に再度のウィーン包囲攻撃に失敗した後は、この「軍事機械」は領土縮小という想定外の事態にうまく対応できず、オスマン帝国は坂を転げるように劣勢となり、ハプスブルク勢の攻勢によって1686年にブダ(ブダペスト右岸)を失い、さらに1688年にはベオグラードをも一時失陥するに至った。⁸⁾

こうして17世紀後半から18世紀にかけてオスマン帝国が劣勢となるにつれて、国内ではさまざまなオスマン帝国改革の意見が出されるようになった。その代表的なものが、フランス文化を中心とする西欧の文物を導入し、オスマン帝国の近代化を計ろうとするもので、スルタン・アフメット3世(在位1703 - 1730)の時代に、大宰相イブラーヒーム・パシャ(在任1718 - 1730)や、イブラーヒーム・パシャによりフランスに派遣されたイルミセキズ・チェレビーなどによって提唱された。⁹⁾ 彼らによって指導され、花開いた欧州文物流入の時代は、トルコ語でラーレ・デヴリ、すなわちチューリップ時代と呼ばれる。日本におけるトルコ史研究のパイオニアである三橋富治男千葉大名誉教授の言葉を借りれば、

「17、18世紀は、西欧の学問的発達の上から眺めると、急速かつ高度に発展した世紀であった。(中略)このような西洋学術の成果は、文物交流という形でオスマン帝国にも反映した。チューリップ時代は、そうした意味での西欧化(ガルプurlashima)の出発点であった。印刷技術をはじめ、軍事技術上のいわば一種の技術革新導入は、やがてオスマン帝国の政治理念に必然的に変化をもたらさずにはおかなかった。」¹⁰⁾

このように、チューリップ時代とは、西欧からの文物の流入により、オスマン帝国が内部から少しずつ変容してゆく時代として捉えることができる。イブラーヒーム・ミュテフェッリカの金属活字印刷所設置も、こうした時代背景なしには考えられないことであった。

2. イブラーヒーム・ミュテフェツリカの前半生—そのイスラーム改宗に至る軌跡—

イブラーヒーム・ミュテフェツリカの前半生、特にイスラームへ改宗するに至った過程は、はっきりしていない。

彼の前半生についてわかっていることは、1670—1674年頃に現在はルーミア領となっているトランシルバニア地方のコロジュヴァール（現在のクルージュ）でマジャール人（ハンガリー人）を両親として生まれ、キリスト教徒として育ち、同地方の神学校で学んだという程度のことである。¹²⁾

このトランシルバニア地方は、宗教改革以降プロテスタントの教えが広まり、初めはルター派の勢力が強かったが、17世紀にはカルヴァン派がトランシルバニアに浸透していき、住民の多くがカルヴァン派に属することとなった。そこで、ミュテフェツリカの場合も、カルヴァン派の教職者であったと目されていた。¹³⁾

しかし、最近の研究によると、ミュテフェツリカは、実はキリスト教の三位一体の教えを否定するユニテリアン派の信徒であり、彼の学んだ神学校も彼の在学当時はユニテリアン派の学校で、その後同校はカルヴァン派に変わったとも言われる。¹⁴⁾ 実際、この時代におけるトランシルバニアの宗教分布は、プロテスタントではカルヴァン派、ルター派、ユニテリアン派の三派があり、それに加えてギリシア正教やカトリックが存在しており、カルヴァン派が最大の勢力を有していたものの、ユニテリアン派もある程度の勢力を有していたので、ミュテフェツリカがユニテリアン派の信徒や教職者であっても不自然ではない。¹⁵⁾

いずれにしてもミュテフェツリカがキリスト教徒として育ち、教職者としての教育を受けながら、やがてイスラームに改宗したことは確かなようである。彼がイスラームに改宗したのは、18歳の時にオスマン軍の捕虜となってイスタンブルに連行された時であるという説もある。この説は、1732年にイスタンブルでイブラーヒーム・ミュテフェツリカに会ったマジャール人貴族でカトリック教徒のツェザルナク・ド・ソーシュールの記述に基づくもので、彼の記録によれば、ミュテフェツリカは、1691年にオーストリア軍とオスマン軍が交戦した際にオスマン軍の捕虜となり、イスタンブルの奴隷市場で売却された。彼の主人となった人物は過酷な男で、郷里の貧しい親族が自分を身受けしてくれる可能性もなく、やむなくイスラームに改宗し、イブラーヒームと名乗った

という。¹⁶⁾

しかし、西のハプスブルク帝国と南のオスマン帝国に挟まれ、三橋富治男教授の言葉を借りれば「あたかも時計の振子のように東西にゆれ動く状況にあった」16 - 17世紀当時のトランシルバニア情勢を考えると、ミュテフェツリカのイスラーム改宗は強制されてのことではなく、むしろ、オスマン帝国の勢力後退により郷土トランシルバニアがカトリックのハプスブルク帝国の支配下に入り、カルヴァン派とユニテリアン派とを問わずカトリック勢力から圧迫を受けることを嫌っての自発的行動ではなかったかと思惟される。¹⁷⁾

実際、1691年にトランシルバニア公国領がハプスブルク帝国領に編入されてから、トランシルバニアのプロテスタント諸派に対するカトリック勢力からの圧迫が強まったことについて、コーシュ・カーロイは次のように指摘している。¹⁸⁾

「新たなハプスブルク統治がとった最初の文化政策の一つは、カトリックの復興と反宗教改革の組織化であった。当然、これらは三十年戦争下や、それ以前に世の中をおおった非寛容の精神からではなく、穏健な方法で行われた。ジュラフェヘルヴァールのカトリック司教職がふたたび復活され、追放されたイエズス会士は、盛大にコロジュヴァールへと戻ってきた。しかし、ウィーンは反宗教改革という武器を強化増大させることをおそらく意図し、ギリシア東方教会の一部のルーマニア人聖職者に、ギリシア正教からローマ〔カトリック〕への改宗を宣言させ、ギリシア・カトリック教会の組織化、司教職の設置、司教の財産の確定などを行った。このようにして、トランシルバニア公国の国庫資産は当然のごとくローマ・カトリックとギリシア・カトリックの司祭職双方に、資産的基盤として役立てられたのである。」

このような情勢下で、トランシルバニアのユニテリアン派の信徒や教会は、カトリック並びにギリシア正教双方から圧迫を受け、1730年代までに勢力を掘り崩されるに至った。¹⁹⁾

イブラーヒーム・ミュテフェツリカは、郷土トランシルバニアがこのような状況に陥り、ユニテリアン派の信仰も危機に立たされることを見越してオスマン帝国へと走り、宗教的信条から見てユニテリアン派に近いイスラームの信仰を受容するに至ったものらしい。

そのことは、1710年頃に彼が執筆した *Risāle-i Islāmiye* 『イスラーム論』の

記述からある程度窺い知ることができる。この『イスラーム論』は、長い間写本でのみ伝わってきたものであるが、トルコのハリル・ネジャティオウル博士によりローマ字転写のトルコ語校訂本が1982年に刊行され、誰でも容易に読むことができるようになった。本書の中で、著者イブラーヒーム・ミュテフェッリカは、自分が青年時代にひそかに反三位一体の著作を読み、聖書に預言者ムハンマド（マホメット）の到来が予言されていたということを発見し、情情的にはその頃からイスラーム教徒になっていたという。²⁰⁾

そのような状況を踏まえ、当時の政治情勢を考えれば、ユニテリアン派からイスラームへという、改宗に至る心の軌跡は、自然なこととして理解できよう。そのことを、『トルコ書物史』の著者アルパイ・カバジャルは、当時のトランシルバニア情勢について述べ、イブラーヒーム・ミュテフェッリカの改宗に関する従来の説が誤りであることに言及した上で、次のように指摘している。²¹⁾

「これらすべてのことは、1692年頃にイブラーヒーム・ミュテフェッリカが、カトリックのハプスブルク帝国の統治下に入ったトランシルバニア—このことのために、トコリ・イムレはオスマン帝国へ亡命したのである—このイエズス会士の教皇（インノケンティウス12世のこと—引用者注）による恒久的な圧迫の下に置かれる国に生きるよりは、オスマン帝国へ亡命してイスラーム教徒となる道を選ぶことを後押しした理由として推測されることなのである。」

このように、イブラーヒーム・ミュテフェッリカの改宗については、カトリックのハプスブルク帝国の支配を嫌って、それよりはオスマン帝国の方でイスラーム教徒になる道を選んだという説が有力であるが、A. Kh.ラフィコフは、この説に対し、オーストリア軍とオスマン軍の交戦時に、彼がオスマン軍団に徴発され連行された可能性もあると反論している。²²⁾

しかしラフィコフもイブラーヒーム・ミュテフェッリカがカルヴァン派ではなくユニテリアン派の信徒であったという説には賛成しているので、ユニテリアン派からイスラームへというイブラーヒーム・ミュテフェッリカの改宗の軌跡は、ほぼ確かめられたと言えるであろう。²³⁾

3. オスマン帝国の一官僚としてのイブラーヒーム・ミュテフェッリカ

イブラーヒーム・ミュテフェッリカがいつどのようにしてオスマン朝に仕えるようになったかという点について、正確なことはわからない。一億点を越え

るといわれるオスマン朝の現存文書の中には、あるいはこの点について記した史料があるのかも知れないが、現時点では、確かな文書の証拠は見当たらない。オスマン朝の年代記の一つであるジェヴデット・パシヤの『ジェヴデット史』には彼についての記述があり、それによると、イブラーヒーム・ミュテフェツリカは「数学を大変良く知っており」また、「能力があり、多方面に通じた、知的で優れた価値を有する人物」であって、ミュテフェツリカ（近衛騎兵）として99アクチェのティマール（封土からの収入）を宛がわれた。²⁴⁾

それ以前、具体的には1691年以降、1710年頃に『イスラーム論』を執筆し、それを機縁としてオスマン朝に仕えるようになり、1715年頃にミュテフェツリカとして任用されるまでのおよそ25年間は、彼がどこにいて何をやっていたか不明なところが多い。²⁵⁾

ただし、1691年にハプスブルク帝国がトランシルバニアを領有するようになって以来、イブラーヒーム・ミュテフェツリカは、トランシルバニアにおける反ハプスブルク勢力の旗頭であるトコリ・イムレのいわば連絡将校としてオスマン帝国との折衝にあたっていたようであり、そうした仕事の過程で、母国語のハンガリー語や学校で学んだラテン語のほかに、トルコ語を身に付け、ひいてはオスマン朝に仕える足がかりをつかんだのかも知れない。²⁶⁾

『イスラーム百科辞典』第二版の記述によると、イブラーヒーム・ミュテフェツリカがオスマン朝に仕えるようになったのは、次のような次第であった。²⁷⁾

イブラーヒーム・ミュテフェツリカは、イスラームに改宗後10年くらいしてから『イスラーム論』を執筆し、自分がキリスト教ユニテリアン派の教えからイスラームの受容に至った過程を記し、その中でカトリックの教えと教皇の世俗的権力を攻撃し、また、イスラームがやがてカトリックに対して勝利を収めるであろうと説いた。こうした著者の主張は、カトリック勢力と対決する第二段階に来ていたオスマン朝の人士に喜ばれたと考えられる。

この論著の執筆後に彼はミュテフェツリカとしてオスマン朝に任用され、また、オスマン朝スルタンの助言者並びに使節となった。以後彼は、オーストリアやロシアとの外交交渉にあたり、また、ハンガリーをオーストリア支配下から脱却させ独立させる工作にも従事した。彼は、ロシアへの対抗策としてのスウェーデンとの友好協力関係推進にも携わり、また、コーカサスの

ダゲスタンにも外交関係での出張を命じられた。

以上が、『イスラーム百科事典』第二版における、オスマン朝の一官僚としてのイブラーヒーム・ミュテフェツリカの任用と、与えられた任務のあらましについての記述の要約である。

彼は、ヨーロッパ出身の人としては当然の事ながら、オスマン朝の政治についても意見を有し、フランス、ロシアなど欧州諸国の政治制度についての著作『諸国家の秩序における科学的方法』を著わし、自らの印刷所から1732年に出版した。²⁸⁾本書は、オスマン朝の制度改革の参考となるよう執筆されたもので、オスマン朝の人士にある程度の影響を及ぼした。その点について、アラン・パーマーは次のように記している。²⁹⁾

「同じ年(1732年)もおしつまってから、イブラヒム・ムテフェーリカは、国家統治学に関する彼自身からの問題提起の形で『統治の書』(『諸国家の秩序における科学的方法』のこと—引用者注)という50頁ほどの論文を印刷して、スルタンに贈呈した。彼は他の国々の現存政権の形態について詳しく述べ、外交政策は隣接地域の地理的構成との関連において進めるべきであることを君主に促し、異教徒の軍隊の軍事技術や規律をオスマン軍にどうやって学ばせればよいかについても提案した。ムテフェーリカは立場上、異教徒軍についてさりげなく軽蔑の念を示しておくことも忘れなかった。マフムト1世は感じるどころあってこれを取り上げ、後年の多くのスルタンたちと同じように、外国人の専門家にアドバイスを求めた。」

しかしながら、軍制一つを取ってみても、オスマン帝国にヨーロッパ式軍団が導入されたのは、ようやくセリム3世(在位1789-1807)の時代にニザム=ジェディド(新秩序)と呼ばれる政治改革がなされてからのことであり、イブラーヒーム・ミュテフェツリカの生前には、彼が思い描いていたようなオスマン朝の改革はついになされなかった。³⁰⁾

その他、全体的に見て、オスマン朝の官僚としてのイブラーヒーム・ミュテフェツリカには、対オーストリア政策の方面での活躍が見られるものの、目覚ましい業績というものは特に見当たらないようである。(「ミュテフェツリカ関係年表」参照)

4. オスマン帝国初の金属活字印刷所設置の公認に至るまで—皇帝、総理大臣、宗務長官との折衝—

イブラーヒーム・ミュテフェッリカの名前が今日記憶されているのは、何よりもまずイスラーム世界初の金属活字印刷によるアラビア文字表記トルコ語文献の出版を行ったという事実によってである。この記念すべき事業について、1734年にイスタンブルで彼と接触し、帰国後の1735年に既刊分のミュテフェッリカ版13点（地図を含む）を出版者ミュテフェッリカから寄贈されたスウェーデン人カールソンは、それらの全てをスウェーデン政府に納めたが、その時にそれらの図書に付した同年7月20日の覚書に次のように記している。³¹⁾

「1726年にコンスタンティノーブルで小さな手書きの小冊子が流布したが、その中で大衆にとっての印刷所設置の利点すべてが、詳細に説明されていた。この同じ小冊子は、最後には、自然の流れで、大宰相イブラーヒーム・パシャのもとにも届いた。彼はこれを読んで喜び、小冊子の著者の考えに大いに賛成した—というのも、彼は好奇心で一杯の宰相だったからである。そこで大宰相は、この小冊子を、その頃国を統治していたスルタン・アフメット三世に捧げた。この皇帝は、この小冊子に大変満足であると述べ、ムフティー（宗法学者）もこの小冊子について意見を述べよと命令した。小冊子の著者の名はすでにイブラーヒーム・エフェンディとして知られていたが、この人物は、東洋諸語ばかりでなくラテン語も知っていた。

ムフティーはフェトヴァ、すなわち自身の署名入りの布告を通じて、印刷所の開設が極めて有益であると宣言し、小冊子の著者の発明と大衆への熱意を高く賞賛した。

帝国で法に最も精通した16人が意見を求められた—彼らはそれぞれ違った方面の事柄に精通していたからである。彼らは、ムフティーと同様、出版事業の設立を賞賛すると共に、この有益な考えがひらめいた著者をも賞賛した。

そこでコンスタンティノーブルにおける印刷事業の設立についての勅許が与えられた。この勅許は、やがてハッテ・シェリフ（これは、皇帝が自らの手で記すものである）により確認された。その結果、短い間にイブラーヒーム・エフェンディは事業を設立した。彼はそれまでに何人かの必要不可欠な働き手を、文字を造るタイプ鑄造工数名共々ドイツからすでに呼

び寄せており、事業をすぐに始めることができた。」

スウェーデン人カールソンが、ミュテフェツリカからの贈呈本と共にスウェーデン政府に宛てた覚書には、このほか、贈呈本のそれぞれについての説明がある。³²⁾

ここで引用したカールソンの覚書によると、オスマン帝国初のアラビア文字によるトルコ語文献の印刷事業は、朝野の賛同を得てきわめてスムーズに開始されたように見える。しかし、これまでの研究によると、この新奇な企てを警戒する動きも見られたという。そうした動きの代表的なものが、宗教者と、当時4千人を越えていたといわれる書写人たちによるもので、特に書写人たちは、金属活字印刷の導入により、自分たちの書写の仕事が奪われるのではないかと恐れたという。³³⁾

そのこともあって、ミュテフェツリカに与えられた金属活字印刷の許可には条件が付けられていた。それは、この印刷許可には、書写人たちが仕事として書写している書籍の大多数を占めるところの宗教書を含まないということである。つまり、コーラン、タフスィール、ハディース、フィクフ等の書物以外は印刷してよろしいということである。このことを定めたハッティ・フマユーン（勅令）並びにフェタヴァー（宗務長官の布告）が、ミュテフェツリカの開業の辞共々、ミュテフェツリカ印刷所の出版第一号である『ヴァーンクリーの辞書』（1729）の冒頭に掲載されている。³⁴⁾

上記のカールソンの覚書には記されていないが、金属活字印刷事業の許可を求める請願は、イルミセキズ・チェレビー・パシャの子サイド・エフェンディとイブラーヒーム・ミュテフェツリカの連名でなされ、許可もこの兩人に与えられている。³⁵⁾

サイド・エフェンディは、イブラーヒーム・ミュテフェツリカと共にオスマン・トルコに金属活字印刷技術を導入した立役者である。彼は、1720年に父親のイルミセキズ・チェレビー・パシャと共にフランスへ派遣され、同地で、印刷された図書とそれを収めた図書館に強い印象を得て帰国している。彼は、その頃金属活字印刷を始めようと試みていたイブラーヒーム・ミュテフェツリカに接触し、二人の共同事業として西洋式の金属活字印刷をオスマン帝国に導入しようとしたのである。³⁶⁾

ともあれ、このようにして、宗教界や書写人たちの反撃を巧妙に回避しながら、ミュテフェツリカ印刷所は、首都イスタンブルで産声を上げようとしていた。

5. ミュテフェッリカ金属活字印刷所の活動と発行書目

1727年にオスマン帝国皇帝（スルタン）、総理大臣（サドラザム）、宗務長官（シエイヒュル・イスラーム）のそれぞれから金属活字印刷物刊行の許可を得たサイド・エフエンデイとイブラーヒーム・ミュテフェッリカは、早速その準備に取りかかり、イスタンブル市内のミュテフェッリカの私邸に印刷所を設けた。³⁷⁾

すでにイブラーヒーム・ミュテフェッリカは、1719年にマルマラ海の地図を印刷・発行してイブラーヒーム・パシヤに献呈し、その後1724年に黒海の地図も刊行、1727年には刊行予定の図書の見本頁を印刷して関係各方面に配るなどして、印刷の準備は整っていたので、ミュテフェッリカ印刷所は順調にスタートした。³⁸⁾

この印刷所で刊行された記念すべき第一の出版物は、Lugāt-i Vānqulī（ヴァーンクリーの辞書）上下二冊本であった。この本の印刷には1728年から取りかかり、1729年に無事刊行した。³⁹⁾以後、1745年にイブラーヒーム・ミュテフェッリカが死去するまでにこの印刷所で刊行された図書17点は、次の通りである。⁴⁰⁾

1. Lugāt-i Vānqulī（ヴァーンクリーの辞書）1141（1729）刊 全2巻 各1000部 アラビア語、トルコ語
アル・ジャウハリーの有名なアラビア語辞典（アラビアーアラビア）をメフメット・ヴァーンクリーがトルコ語に翻訳したもの。単語の配列に工夫が見られる。
2. Hacci Halīfa. Tufhet'ül kibār fī esrarül-bihār（海戦についての貴人たちへの贈り物）1141（1729）刊 1000部 トルコ語
歴史家キャーティブ・チェレビーが書いたオスマン朝海戦史。トルコで初めて出版された地図入りの書物である。イギリスで1858年頃に英訳が刊行されている。
3. Krusinski, J. T. Tārīh-i seyyāh der beyān-i zuhūr-i Agvaniyān ve sebeb-i inhidām-i bina-i devlet-i Shāhān-i Sefaviyān（アフガン人の登場の説明及び大サファヴィー朝君主国家崩壊の政治史）1142（1729）刊 1200部 トルコ語
イエズス会士クルシンスキーが書いた、サファヴィー朝崩壊期のペルシア政治史。

初めラテン語で書かれ、イブラーヒーム・ミュテフェツリカの手でトルコ語に訳されて刊行された。1731年にドイツのライプチヒでラテン語訳が刊行されている。

4. Mes'ūdī. Tārīh-i Hindī Garbī el-müsem mā be-hadīs-i nev (西インド史) 1142 (1730)刊 500部 トルコ語
西インド(アメリカ)に関する歴史・伝説集。トルコで初めての挿絵入り出版物として知られ、また、トルコで最初のアメリカに関する出版物としても有名。
5. Tārīh-i Tīmūr Gūrgān (ティムール・キュレゲンの歴史) 1142(1730)刊 500部 トルコ語
イブン・アラブシャーがアラビア語で記したティムール朝の始祖ティムールの伝記を、ナズミーザーデがトルコ語に抄訳したもの。
6. Sūhaylī. Tārīh-ul Misrul-kadīm ve Misr'il jedīd. (古今エジプトの歴史) 1143(1730)刊 500部 トルコ語
本書は、二つの部分から構成されており、最初の部分はイブン・ズンプルの『エジプト征服』というアラビア語史料のトルコ語訳で、あとの部分は、著者スュハイリー自身によるオスマン朝のエジプト征服についてのトルコ語による記述である。
7. Nazmīzāde. Gülşen-i hülefā (カリフたちの薔薇園) 1143(1730)刊 500部 トルコ語
『ティムール・キュレゲンの歴史』の訳者ナズミーザーデが著わしたバグダードの年代記で、1730年までを扱っている。
8. Holdermann, J.B.D. Grammaire turque (トルコ語文法) Constantinople 1730刊 1000部 フランス語
トルコ初のラテン文字による出版物。
9. Müteferrika, İbrāhīm. Usūl'ül-hikem fī nizām'ül-ümem (諸国家の秩序における科学的方法) 1144(1732)刊 500部 トルコ語
イブラーヒーム・ミュテフェツリカが欧州諸国の国家制度や軍事制度などをオスマン朝の人々に紹介した書物。1769年にウィーンでフランス語訳が刊行されている。
10. Müteferrika, İbrāhīm. Fuyūzat-i miknatisīyye (磁石の有用性) 1144(1732)刊 500部 トルコ語

イブラーヒーム・ミュテフェッリカがラテン語資料またはアラビア語資料から訳出・刊行した磁石に関する啓蒙書。トルコで出版された初の科学書であり、また、ミュテフェッリカ版の中で最小の書物である。

11. Hacci Halîfa. Kitabi Cihannümâ (世界記述の書) 1144(1732)刊 500部
トルコ語

歴史家ハッジ・ハリーフアの手になる世界地理の書。豊富な図版入りの大部の書物で、ミュテフェッリカ版の中でも特に有名。図版は、見開きも含め全部で40あるが、その中の21番目が“İqlimi Asya (アジア)”で日本も入っており、24番目が“Cezirei Yaponya (日本の島)”である。この24番目の地図は、出版されたイスラーム文献の中に出てくる日本図としては最古のものである。⁴¹⁾

12. Hacci Halîfa. Takvim'üt tevârih (歴史の暦) 1146(1733)刊 500部 ペルシア語、トルコ語

歴史家のハッジ・ハリーフアがペルシア語で作成した年表にメフメット・シェイヒーとイブラーヒーム・ミュテフェッリカがトルコ語で増補したもの。オスマン朝史研究上きわめて重要な史料とされている。

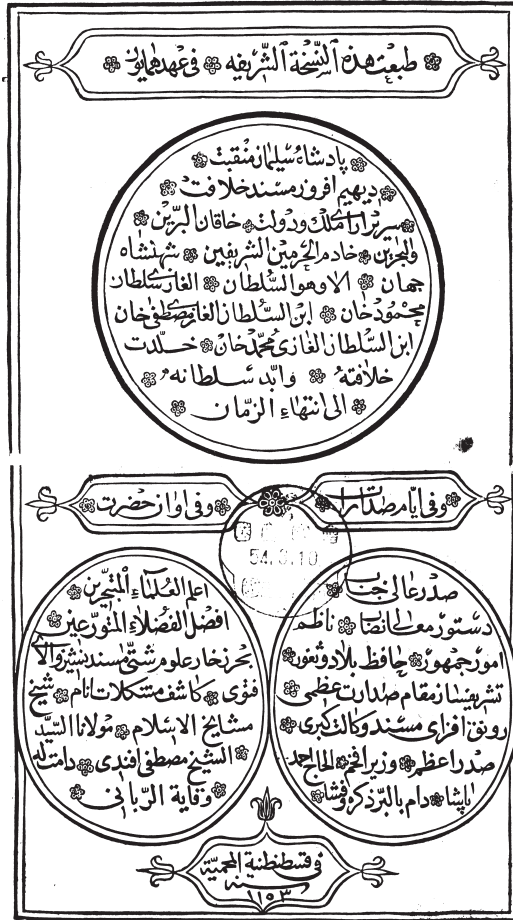
13. Na'ima. Tarih-i Na'ima (ナイマ史) 1147(1734)刊 全2巻 500部
トルコ語

オスマン朝の史官ナイマによる1591年から1660年までの年代記。当該時期に関する根本史料。この『ナイマ史』の記述を引き継ぐのが、『ラーシド史』と『チェレビー・ザーデ・アスム史』である。『ナイマ史』はイギリスで英訳が刊行されたことがあるが、未完に終わっている。

14. Rashid. Tarih-i Rashid (ラーシド史) 1153(1741)刊 全3巻 各500部
(推定) トルコ語

『ナイマ史』の記述を引き継ぐ、1660年から1722年までのオスマン朝年代記。カールソンの覚書によれば、本書はもと300冊から成る著作であったが、スルタン・アフメット3世がそれを80冊に縮めるよう著者に命じ、悩んだ著者がすぐに死んでしまったため、イブラーヒーム・ミュテフェッリカ他数名の手で上中下3冊に入る分量に縮小したという。⁴²⁾

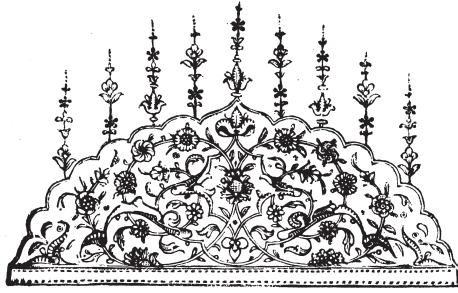
本書は、赤インクで枠を囲った中に本文が印刷されている。紙にはGLCという文字の透かしが入っている。恐らくフランスから輸入された紙に印刷、出版されたのであろう。(図版参照)



図版1 『ラーシド史』第1巻巻頭の献辞（皇帝、総理大臣、宗務長官に捧げ
たもの）



図版 2 『ラーシド史』 第 1 卷本文冒頭



تاریخ چلبیزاده آفندی تسبیح نبوی صلی الله علیه و آله

حمدی که بنور قدس آراسته اند * حمدی که جوهر زم انس پیراسته اند * حمدی که بد آن حمد
تقرب جویند * آنها که زهر دگون بر خاسته اند * نویسنده و قلم کون و مکان و نگارنده صحیف
دار الملک عالم امکان اولان قلم مجزوم و واسطتیه آفریننده زمین و زمان و روزی دهنده کافه
انش و جان حضرت خداوند واجب الوجود بی زوالک معروض درگاه کبریا و الهی و سلسبیل
تجربت و درود پر موجب پدیشاه پر یوزه فلک نه بسودی کف وجود * نام مجد ارتدی نشر آن تکین
روضه غنای عالم و دوحه غرای آدمه سر مایه فیضیان ماء الحیوت وجود اولان سلطان دار الملک
وسالت * شهنشاہ تخت عالی بخت بسالت * در همنای سبل پیشوای انبیا و رسل نظم مجد شه
لاجودی سرور * کز و هست هستی عمارت پذیر * زمین و فلک پاک غبار رهش * ازل
تا ابد یک نامنا کوش * بجائی که توسن بر آیکخته * جناح ملائک فرور بخته * بحضرت کربسته
بر عزم کار * میا بجای امر زش کرد کار * کرم بین کز لسان امت پناه بو کنه ما کنیم او بود عذر خواه
نش جناب خجبت مابنک رولنه سوی پیشگاه بارگاه محبوسین قلوب * شهیبت توحید
وسام خلفاء راشدین و ائمه معصومین و کافه آل و اصحاب کریم رضوان الله تعالی علیهم
اجمیع حضراتک مستزاد ستایش و ثنالیله نقیم اولند قدن صکره پیشگاه ارباب عرفانده
یونیم اوزره سر پوش اندازی طبعیه بیان قلنور که اراده علیه بنای قدرت کرد کاری
وشیبت اولیده مهند سر حکمت پرورد کاری ایله اساس بنای کارخانه جهان نهاده * سطلع اب
و محقق معنای بصیرع و کل الادی فوق الذراب تراب فی شایسته ایتاب اولوب نقش کتابه

図版 3 『チェレビザーデ史』本文冒頭

15. Çelebîzâde Asîm. Tarih-i Çelebîzâde Asîm (チェレビザーデ・アスム史) 1153(1741)刊 500部(推定) トルコ語

『ラーシド史』の記述を引き継ぐ、1722年から1729年までのオスマン朝年代記。『ラーシド史』第3巻と合冊製本されることが多い。(図版3参照)

16. Ömer Efendi Bosnavi. Ahvāl-i Gazevat der Diyārī Bosna (ボスニア地域遠征記) 1154(1741)刊 500部(推定) トルコ語
1736年から1739年にかけてボスニアで起った、ハプスブルク帝国とオスマン帝国の戦いの記述。本書にはウィーンで刊行のドイツ語訳とロンドンで刊行の英訳がある。
17. Şu'uri. Farhang-i Şu'uri (シューリーの辞書) 1155(1742)刊 全2巻 各500部(推定) ペルシア語、トルコ語
シューリーのペルシア語・トルコ語辞典。"Lisan ül-acam"とも呼ばれる。以上、発行点数17点22冊。刊行総数13,700冊(推定)。⁴³⁾

6. イブラーヒーム・ミュテフェッリカの死とミュテフェッリカ金属活字印刷所の廃止

1745年にイブラーヒーム・ミュテフェッリカが死去すると、ミュテフェッリカ印刷所は機能を停止するに至った。1730年に首都イスタンブルでパトロナ・ハリルの乱が起きて暴動となり、大宰相イブラーヒーム・パシャが処刑され、スルタンのアフメット3世が退位させられた時は、ミュテフェッリカ印刷所にとっても危機で、ドイツから呼び寄せた技術工が揃って逃げ出してしまったが、幸い印刷所は民衆の焼き討ちにも会わず、情勢が落ち着くと、ミュテフェッリカは新スルタン・マフムート1世らから出版にかかわる許可をもらい直し、自分の5人の子供とともに出版事業をすぐに再開することができた。⁴⁴⁾

この時は、前回とは異なり、この出版事業許可は、イブラーヒーム・ミュテフェッリカー一人に与えられたものであり、従って、彼が死んだ時点でこの許可も無効となってしまった。

そこで、イブラーヒーム・ミュテフェッリカの娘婿と言われているカーディー・イブラーヒームが、カーディー・アフメットと共に、1746年にスルタン・マフムート1世らから出版事業の許可をもらい直した。⁴⁵⁾しかし、結果的に彼らは、自分たちがイブラーヒーム・ミュテフェッリカから引き続いだ印刷所から何も刊行しないまま空しく時を費やし、1755年にこの印刷所は事業を停止した。⁴⁶⁾

そこで、カーディー・イブラーヒームは、もう一度奔走して時のスルタン・オスマン3世から出版の許可を取り付け、『シュールの辞書』刊行後14

年たった1756年に、かつてミュテフェツリカ印刷所の門出を飾った『ヴァンクリーの辞書』の再刊にこぎつけた。このようにして事業を再開したミュテフェツリカ印刷所から刊行された書物は次のとおり。⁴⁸⁾

1. Vānqulī. Luġāt-i Vānqulī (ヴァンクリーの辞書) 1170(1756)刊 全2巻
2. Sami, Mustafa. Tarih-i Sami ve Şakir ve Subhi (サーミー、シャキール、スプヒーの歴史) 1198(1784)刊 1730年から1743年までのオスマン朝年代記。
3. Izzī, Sulayman. Tarih-i Izzī (イZZイーの歴史) 1199(1785)刊 1744年から1747年までのオスマン朝年代記。
4. Zainizade, Huseyn b. Ahmed, I' rab ül-kāfiye (“カーフィエ” アラビア語指南) 1200(1786)刊
5. Vauban, S. De. Fenn-i harb (戦争の科学) 1207(1793)刊
6. Vauban, S. De. Fenn-i lāġim (地雷の科学) 1208(1794)刊
7. Belidor, B. F. De. Fenn-i muhasara (戦術の科学) 1209(1794)刊

以上7点の出版物が、イブラーヒム・ミュテフェツリカ死後のミュテフェツリカ印刷所で出版された図書のすべてである。

第1の『ヴァンクリーの辞書』刊行後、ミュテフェツリカ家の人々は出版事業から手を引いた模様で、ミュテフェツリカ印刷所もいつの間にか半ば廃業し、何の著作も刊行されない年月が30年余り続いた。1784年に入り、ベイリクチ・ラーシトとヴァカニユヴィス(史官)ワースフの二人が、スルタン・アブデュルハミト1世の許可を得てミュテフェツリカ印刷所を再興し、今掲げた図書のうち2番目から3番目までを刊行したが、それらの図書は、活字の磨耗などもあって、1756年に刊行の『ヴァンクリーの辞書』と比べても大分見劣りがした。⁴⁹⁾

そこで、古い活字を溶かして鋳造し直し、新たに刊行したのが、上記のうち4番目から7番目までの書物である。

ミュテフェツリカ印刷所は、第7番目のベリドールの著作を出版した1794年を以って事実上廃止され、活字などの備品はイスタンブルの軍事技術学校へ売却され、再利用されることになった。

7. ミュテフェツリカ版の文化史的意義

オスマン帝国領内における金属活字による印刷は、すでに15世紀末にユダヤ人がイスタンブルで始めており、16世紀にはアルメニア人が、17世紀にはギリシア人が、それぞれおのおのの民族文字を用いた金属活字印刷をオスマン帝国領内で始めていた。⁵¹⁾

そうしたことから考えれば、イブラーヒーム・ミュテフェツリカが行った金属活字による印刷事業は、オスマン帝国領内での初の金属活字印刷というわけではない。もちろん、最初に述べたように、彼の行った印刷事業は、イスラーム教徒が現地語文献（アラビア文字文献）を金属活字により印刷・出版した最初のものとして、記念すべきものであるが、彼の印刷・出版事業の文化史的意義は、もっと別のところにある。

すなわち、イブラーヒーム・ミュテフェツリカが行ったことは、伝統的なイスラーム社会に金属活字印刷という西欧の革新的な技術を導入することに成功したという点にある。

オスマン帝国では、すでに15世紀の末から金属活字印刷の存在は知られており、また、領内のユダヤ教徒やキリスト教徒がこの技術を使って彼ら専用の文献を出版することも許容していた。しかし、オスマン帝国の人々は、スルタンから庶民に至るまで、この技術を導入して自分たちもアラビア文字のトルコ語文献を印刷しようとは考えなかったのである。⁵²⁾

オスマン帝国で金属活字印刷の技術導入が遅れた理由については、これまでいろいろな説が唱えられているが、やはり宗教的な理由、すなわち、伝統的なイスラームのあり方に固執して、新しいものを容易に受け付けない保守的なオスマン社会の様相に原因があるのではないだろうか。時代は下るが第一次大戦後にオスマン帝国の残骸の中から新生トルコ共和国を誕生させたケマル・アタテュルクは、オスマン社会の保守性について、次のようにきびしく弾劾している。⁵³⁾

「いかなる形であれ、私は、トルコの共同体の中に、みずからを導く科学と文明の光がありながら、シェイフ（イスラーム社会の長老—引用者注）とその他の人々の助言により道徳的、さらには物質的幸福を求める原始的な人々の存在を許さない。トルコ共和国は、シェイフやデルヴィーシュ（修道僧）や見習いや宗派の人間たちの国ではあり得ないということを、あなたがたは知らねばならない。」

このケマル・アタテュルクの言葉から知られるように、宗教者たちが主導権を握っていた保守的なオスマン社会の中で、18世紀前半という早い段階で、宗教界からの反発や抵抗を上手に回避しながら、西欧の革新的技術の一つである金属活字印刷を導入、一定期間定着させたということが、イブラーヒーム・ミュテフェッリカの金属活字印刷事業が有する文化史的意義の第一のものである。

ミュテフェッリカ版出版の文化史的意義の二番目として、グーテンベルグ聖書と同様に、それまでの写本文化の伝統を生かしつつ、見て美しく、快く読むことのできる活字印刷本の作成を心がけ、それに成功しているという点が挙げられる。グーテンベルグ聖書の場合には、西洋中世の修道院におけるラテン語写本作成の伝統を踏まえ、ゴシック体の活字を鑄造しているのに対して、ミュテフェッリカ版の場合は、イスラーム誕生以降のアラビア語、ペルシア語、トルコ語写本作成の長い伝統を踏まえ、それらの言語の写本で最も普通に用いられるナスフ体の活字を鑄造して用いている。⁵⁴⁾

このナスフ体活字で印刷されたミュテフェッリカ版は、まるでナスフ体の写本を読んでいるような気にさせる、素晴らしい出来栄えの印刷物となっている。さらに、イブラーヒーム・ミュテフェッリカは製本や装丁にも心を配り、本の外観も見事な出来栄えになっている。⁵⁵⁾

こうした素晴らしい仕上がりの出版物は、その後のオスマン帝国やトルコ共和国でも出ていないようであり、ミュテフェッリカ版17点22冊は、トルコにおける出版物の歴史の中で、紙、印刷、製本といった面で技術的に頂点に達したものであったと言える。

ミュテフェッリカ版がこのように優れた出来栄えの出版物となったことは、イブラーヒーム・ミュテフェッリカ個人の才能や努力に負うところが大きく、彼が死去してのちは、同じ活字セットを用いて印刷しても、もはやミュテフェッリカ版と同じレベルの出版物は2度と生み出し得なかった。そのことは、1756年に刊行された『ヴァーנקリーの辞書』第2版と1729年の第1版を見比べてみるとわかるという。⁵⁶⁾

筆者は、本稿執筆にあたり、ミュテフェッリカ版『ラーシド史』(1741)と、マトバー・アーミレ版『ラーシド史』(1865)を見比べてみたが、同じ『ラーシド史』でも、後者は前者の半分のサイズの本になっており、活字も小さく、もはや紙や装丁への配慮、版面の美しさへの気配りなどは失われている。一言で言って、後者には前者にあった芸術性が消滅してしまっている。⁵⁷⁾

さらに、オスマン帝国でアラビア文字による金属活字印刷が普及した19世紀以降になると、ミュテフェツリカ版のような立派な書物は姿を消し、紙も活字も質が低下してしまったことは、残念なことである。

イブラーヒーム・ミュテフェツリカの金属活字印刷事業における文化史的意義の第3番目として、数は少ないながらも貴重な文献を散逸の危機から救ったという点が挙げられる。

もしイブラーヒーム・ミュテフェツリカが出版事業に取り組まず、もっぱらオスマン朝の官僚として働いて生涯を終えたのであったなら、キヤーティプ・チェレビーやナイマヤラーシドの著作は、今日もはや失われているか、写本のまま刊行されずにいたであろう。イブラーヒーム・ミュテフェツリカ自身の著作『諸国家の秩序における科学的方法』も出版に至らず、従ってスルタン・マフムート1世にオスマン朝改革の志を起させることもなかったであろう。また、オメル・エフェンディの『ボスニア遠征記』も写本のままで、広く読まれることもなく、ボスニアにおける民族問題の起源を考えるための重要文献として今日活用されることもなかったであろう。

こうして考えてみると、イブラーヒーム・ミュテフェツリカは、彼の後半生を費やして、後世のわれわれにミュテフェツリカ版という貴重な書物の一群を残してくれたことになる。

イブラーヒーム・ミュテフェツリカの金属活字印刷事業における文化史的意義の第4番目としては、この事業を通じてヨーロッパ諸国にオスマン帝国における印刷文化の水準の高さを知らしめたことである。

すでに述べたように、このミュテフェツリカの印刷事業は、ヨーロッパ諸国の耳目を集め、また、ミュテフェツリカ版として刊行された全17点の内容が優れて現代的なものであったことから、各国はこれらの出版物を熱心に集め、必要に応じて翻訳を行っている。

たとえばスウェーデンでは、東洋学者ノルベリがミュテフェツリカ版で刊行されたオスマン朝の年代記をまとめてスウェーデン語に翻訳し、1822年に出版したが、このオスマン朝年代記集に購入予約をした人は、出版予定数378部に対し345人に上ったという。⁵⁸⁾

また、各国の主要図書館は、出版文化史上に占めるミュテフェツリカ版の重要性に鑑み、積極的にミュテフェツリカ版の収集に努めて今日に至っている。⁵⁹⁾ (表1 主要図書館におけるミュテフェツリカ版所蔵状況)

表1 主要図書館におけるミュテフェツリカ版所蔵状況

所蔵館 書名	国立国会 図書館	東洋文庫	京都外大	米国議会 図書館	マギル大イス ラム研究所	スエーデン王 立図書館	英国図書 館
1.ヴァンクリーの辞書				○	○	○	○
2.オスマン朝海戦史				○	○	○	○
3.ペルシア政治史				○	○	○	○
4.西インド史				○	○	○	○
5.ティムールの歴史					○	○	○
6.古今エジプトの歴史					○	○	○
7.カリフたちの薔薇園				○	○	○	○
8.トルコ語文法				○	○	○	○
9.国家統治論			○		○	○	○
10.磁石の有用性					○	○	○
11.世界記述の書		○		○	○	○	○
12.歴史の暦				○	○	○	○
13.ナイマ史				○	○	○	○
14.ラーシド史	○			○	○	○	○
15.チェレビーザーデ史	○			○	○	○	○
16.ボスニア遠征記						○	○
17.シュールの辞書				○	○	○	○

このように、イブラーヒーム・ミュテフェツリカがその後半生をかけて行ったオスマン・トルコ語による金属活字印刷事業の文化史的意義は、単なる出版文化史のわくをはるかに越える重要なものであった。

おわりに

本稿では、多面的かつ謎の多いイブラーヒーム・ミュテフェツリカの人と業績について、ミュテフェツリカ版の印刷・出版に焦点を当てて述べてみた。このミュテフェツリカ版は、日本国内では5本の指で数えられる程度しか所蔵されていないが、トルコで出版された複製本や19世紀に再刊されたもので国内の図書館に所蔵されているものを含めれば、ある程度その姿や、刊行された内

容を知ることができる。⁶⁰⁾

本稿が、これまであまり知られていなかったイブラーヒーム・ミュテフェッリカの人とその業績について知る手がかりとなれば幸いである。

脚注

- 1) Het Oosters Antiquarium (1997), item 80.
- 2) Carlson, Edvard (1979), p.20.
- 3) Carlson, Edvard (1979), p.14.
- 4) Watson, William J. (1968), pp. 435-436.
- 5) オスマン帝国の歴史については、三橋富治男『トルコの歴史』紀伊国屋書店 1964 (2刷 1970)を参照。本書は日本で初めて書かれたトルコ史概説であり、1990年に近藤出版社から世界史研究双書の一冊として再刊され、また、1994年には「精選復刻紀伊国屋新書」の一冊として復刊されている。
- 6) 三橋富治男『オスマン帝国の栄光とスレイマン大帝』清水書院 1984 参照。
- 7) 筆者作成『ヘイウッド博士トルコ史講義録 1974/1975』（未刊）による。
- 8) 新井政美(2002)、188-193頁。cf. Meier, M.S. (1980), pp. 66-80.
- 9) Rafikov, A. Kh. (1973), pp.80-81; Alkan, A. Turan (1996), pp. 24-27.
- 10) 三橋富治男(1970)、239頁。
- 11) イブラーヒームはアラビア語でアブラハムのこと。イスラーム教徒の名として用いられる。ミュテフェッリカという官職については、Kramers, J. H. (1993), p. 794 及び Hegyi, Klára (1986), pp.45, 53 参照。
- 12) イブラーヒーム・ミュテフェッリカの生涯については、Berkes, Niyazi (1964), pp.36-47; Berkes, Niyazi (1971), pp. 996-998 参照。
- 13) Berkes, Niyazi (1964), pp. 36-37 参照。この時代のトランシルバニアにおけるカルヴァン派については、Wilber, Earl Morse (1952), pp. 99-126 参照。
- 14) Berkes, Niyazi (1971), p. 996.
- 15) トランシルバニア公国における宗教情勢については、コーシュ・カーロイ (1991), 93-126 頁及び柴宣弘 (2001), 46-48 頁参照。

- 16) Berkes, Niyazi(1964), pp.36-37; Orel, Fuat Süreyya(1967), p. 261;Kun, T. Halasi(1968), pp. 896-897; Berkes, Niyazi(1971), pp. 996-997; Rafikov, A. Kh.(1973), p. 89.
- 17) 三橋富治男(1970), 193-197 頁参照。
- 18) コーシュ・カーロイ(1991), 131-132 頁。
- 19) コーシュ・カーロイ(1991), 135 頁; Wilber, Earl Morse(1952), pp. 127-137.
- 20) Necatioglu, Halil(1982), pp. 38-40, 58-59.
- 21) Kabacalı, Alpay(1989), p. 35.
- 22) Rafikov, A. Kh.(1973), p.93.
- 23) Rafikov, A. Kh.(1973), p.93.
- 24) Kabacalı, Alpay(1989), pp. 36-37.アクチェはオスマン朝の銀貨の単位。
- 25) 彼の『イスラーム論』にもこうした点に関する記述は見当たらない。新しい史料が出てこない限り、イブラーヒーム・ミュテフェッリカの前半生は、イスラーム改宗への心の軌跡を別とすれば、謎に包まれたままにとどまるであろう。
- 26) Berkes, Niyazi(1971), p. 997 及び Kabacalı, Alpay(1989), pp.35-36 参照。オスマン帝国においては、デウシルメという男児強制徴用制度があり、主としてバルカンのキリスト教徒の子弟が定期的に狩り集められ、首都イスタンブルに送られてイスラームに改宗させられ、教育を施された上で、オスマン帝国の軍人や行政官に任じられたが、イブラーヒーム・ミュテフェッリカはこの道を歩んではいないと思われる。デウシルメについては、鈴木董(1992), 215-224 頁参照。
- 27) Berkes, Niyazi(1971), p.997.
- 28) 本書については、照井菜穂子(2004), 19 頁参照。
- 29) アラン・パーマー(1991), 70 頁。
- 30) 18 世紀以降のオスマン帝国の改革については、新井政美(2001)を参照。
- 31) Carlson, Edvard(1979), p.21.
- 32) Carlson, Edvard(1979), pp.21-24.
- 33) アラン・パーマー(1991), pp.63-64; Oral, Fuat Süreyya(1967), p.46.
- 34) バーナード・ルイス(2001), 380 頁; Kabacalı, Alpay(1989), pp.124-126.
- 35) Kut, Günay Alpay(1991), p.800.

- 36) Rafikov, A. Kh. (1973), p.85.
- 37) Oral, Fuat Süreyya (1967), p.49; Kabacalı, Alpay (1989), pp. 44-45.
- 38) Kut, Günay Alpay (1991), ibid.
- 39) Watson, William J. (1968), p.437; Het Oosters Antiquarium (1997), item 81.
- 40) Watson, William J. (1968), pp. 437-441; Bayrak, M. Orhan (1982), pp.230-232; Rafikov, A. Kh. (1973), pp.101-144; Kabacalı, Alpay (1989), pp.47-55; Het Oosters Antiquarium (1997), items 81-96.
- 41) 林佳世子 (2003), 055 頁及び永田雄三、羽田正 (1998), 222 頁参照。
- 42) Carlson, Edvard (1979), p.24.
- 43) 筆者が参照した文献の中には、ミュテフェツリカ版の数を 17 点 23 冊としているものがあるが、数が合わない。刊行総数の方は、『ヴァーンクリーの辞書』が上下とも 1000 冊ではなく、上下合わせて 1000 冊だった場合、12,700 冊となる。なお、本稿では、ミュテフェツリカ版各冊の定価についての記述は省略した。
- 44) Carlson, Edvard (1979), pp. 24-26; cf. Kabacalı, Alpay (1989), pp. 55-56.
- 45) Kut, Günay Alpay (1991), p. 801.
- 46) Ibid.
- 47) Kabacalı, Alpay (1989), p.57.
- 48) Bayrak, M. Orhan (1982), p.232; Rafikov, A. Kh. (1973), pp. 150-164; Kabacalı, Alpay (1989), pp.57, 62-64; Het Oosters Antiquarium (1997), items 97-103.
- 49) Het Oosters Antiquarium (1997), items 98-99.
- 50) Kut, Alpay Günay (1991), p. 801.
- 51) Rafikov, A. Kh. (1973), pp. 65-78; Kabacalı, Alpay (1989), pp. 20-30.
- 52) バーナード・ルイス (2001), 378-379 頁。
- 53) 白岩一彦 (1994), 50 頁。
- 54) ゲーテンベルグについては、ブリュノ・ブラセル (1998), 045-071 頁；高宮利行、原田範行 (1997), 89-91 頁。ミュテフェツリカ版のナスフ体については、図版 1-3 を参照。
- 55) Rafikov, A. Kh. (1973), p. 141.
- 56) Het Oosters Antiquarium (1997), item 97.
- 57) ミュテフェツリカ版『ラーシド史』は国立国会図書館所蔵本を参照し

た。マトバー・アーミレ版『ラーシド史』は慶應義塾大学図書館所蔵本を参照した。

58) Het Oosters Antiquarium (2005), item 2657.

59) アメリカ議会図書館も英国図書館も、中東関係所蔵資料の紹介の中で必ず自館所蔵のミュテフェツリカ版に言及していることからわかるように、ミュテフェツリカ版は各国図書館の所蔵資料の中でも最重要な資料群に含まれている。次を参照。

<http://www.loc.gov/acq/devpol/collovers/near-east.html>

<http://www.loc.gov/rr/amed/guide/nes-turkey.html>

<http://www.bl.uk/collections/turkicpb.html>

60) 日本でミュテフェツリカ版を所蔵しているのは、国立国会図書館、東洋文庫、京都外国語大学附属図書館の3館のみであるが、ミュテフェツリカ版の複製本は慶應義塾大学図書館でもいくつか所蔵している。また、ミュテフェツリカ版に関する研究文献も国立国会図書館と慶應義塾大学図書館の所蔵資料で一通り揃う。

地図：東南欧諸国要図



ミュテフェッリカ関係年表

- 1453 オスマン帝国がコンスタンティノープルを攻略。ビザンティン帝国滅亡
- 1455 頃 グーテンベルグがドイツのマインツで西洋初の金属活字印刷を行う
- 1494 ユダヤ人ダビデとサムエルが、コンスタンティノープルで金属活字印刷による初のヘブライ語図書を出版
- 1521 オスマン帝国がハンガリー王国支配下のベオグラードを攻略
- 1526 モハーチの戦い。オスマン帝国軍がハンガリー王国軍を破る
- 1529 オスマン帝国軍、ウィーンを包囲（第一次ウィーン包囲攻撃）
- 1535 ホンテルジュ・ヤーノシュがトランシルバニアのブラショフに高等学院、印刷所、製紙工場を設置
- 1541 オスマン帝国軍、ブダを中心とする中部ハンガリーを占領し、オーフェン・パシャ領設置。東部ハンガリーにはトランシルバニア公国設立（～1691）
- 1550 ヘルタイ・ガーシュパールがトランシルバニアのコロジュヴァールに印刷所を設置
- 1553 反三位一体論者で“Biblia Sacra”の著者ミカエル・セルヴェトス、カルヴァンの告発によりジュネーブで火刑に処せられる
- 1555 アウクスブルクの和議。これによりドイツ国内でルター派公認
- 1557 トランシルバニア公国、領内における信仰の自由を決定。これによりルター派公認さる
- 1564 トランシルバニア公国でカルヴァン派公認
- 1567 トランシルバニアのジュラフェヘルヴァールに印刷所が設置される
- 1571 トランシルバニア公国でユニテリアン派公認
- 1585 ヨーアヒム・クレーウス著『シュレージエン年代記』ドイツ語版初版刊行
- 1613 ベトレン・ガーボル、トランシルバニア公となる
- 1660 フランスとスペインの間でピレネーの和約成る。これによりハプスブルク家支配下のイスパニアとオーストリアの連絡が容易となる
- 1664 ザンクト・ゴットハルトの戦い。オスマン帝国軍、ハプスブルク帝国軍に敗れる
- 1666 ヴァシシュヴァール講和条約。親トルコ的なアパフィ・ミカエルがトラン

シルバニア公として承認される

- 1667 トランシルバニア公アパフィ・ミカエル、フェヘールヴァールのギリシア正教修道院にルーマニア人のための学校と印刷所を設置
- 1670 この頃イブラーヒーム・ミュテフェッリカが、コロジュヴァールのキー-1674 リスト教徒の家庭に生まれる。本名は未詳
- 1677 ハンガリーでトコリ・イムレ伯が指導する反オーストリアの反乱が起こる（～1682）
- 1683 トランシルバニアからトコリ・イムレ伯の軍がオスマン帝国軍の第二次ウィーン包囲攻撃に参加。オスマン帝国軍、ポーランド王ヤン・ソビエスキーの援軍に敗れる
- 1691 トランシルバニア公国がオーストリア（ハプスブルク）帝国領となり、バーンフィー・ジェルジュが初代トランシルバニア総督に任命さる。この頃イブラーヒーム・ミュテフェッリカがトコリ・イムレのもとに馳せ参じたようである
- 1696 オーストリア帝国軍オーフェン（ブダ）を占領
- 1697 ツェンタの戦い。オスマン帝国軍、オーストリア帝国軍に大敗
- 1699 カロロヴィッツ条約。オスマン帝国がハンガリー領の大半を喪失。イブラーヒーム・ミュテフェッリカ、この頃にイスラームに改宗か
- 1703 アフメット3世即位（在位1703 - 1730）
- 1704 ラーコーツイ・フェレンツがトランシルバニアに侵入、ジュラフェヘールヴァールの議会がラーコーツイをトランシルバニア公と宣言
- 1708 オーストリア帝国軍がラーコーツイ・フェレンツの軍を鎮圧
- 1710 この頃イブラーヒーム・ミュテフェッリカが自伝的な要素を含む『イスラーム論』を執筆、イブラーヒーム・パシャに捧ぐ（推定）。これをきっかけとしてオスマン帝国に出仕したらしい
- 1714 パッサロヴィッツ条約
- 1715 イブラーヒーム・ミュテフェッリカ、この頃にミュテフェッリカ（近衛騎兵）に任ぜられる。以後職名が姓として通用。同年、オーストリア帝国のプリンツ・オイゲンとの交渉のためウィーンへ派遣さる
- 1716 イブラーヒーム・ミュテフェッリカ、ハンガリーの独立派との折衝のためベオグラードへ向かう
- 1717 ラーコーツイ・フェレンツ、フランスを經由してオスマン帝国に来る

- 1719 イブラーヒーム・ミュテフェツリカ、マルマラ海の地図を印刷
- 1720 イブラーヒーム・ミュテフェツリカ、ラーコーツィ・フェレンツとの連絡役に任じられる
- 1724 イブラーヒーム・ミュテフェツリカ、黒海の地図を印刷
- 1727 イブラーヒーム・ミュテフェツリカ、金属活字印刷の有用性を説いた文書を作り、関係各方面に配る。勅許を得て印刷所を設立
- 1729 イブラーヒーム・ミュテフェツリカ、イスラーム圏で最初のアラビア文字による金属活字印刷本である『ヴァーנקリーの辞書』を刊行。同じ年にイランの地図を刊行。他にエジプト地図も刊行（年代は不明）
- 1730 イスタンブルでパトロナ・ハリルの乱起こる。イブラーヒーム・パシャ処刑。ミュテフェツリカの出版事業が一時中断。
アフメット3世退位し、マフムート1世即位（在位 1730 - 1754）
- 1732 ラーコーツィ・フェレンツに同伴してイスタンブルに赴いたマジャール人カトリック教徒のチェザルナク・ド・ソーシュール、同地でミュテフェツリカに会う
- 1734 スウェーデン人カールソン、イスタンブルでミュテフェツリカと交流
- 1735 オーストリア軍、ベオグラードを攻略。スウェーデン人カールソン、イブラーヒーム・ミュテフェツリカの出版活動について覚書を記す。ラーコーツィ・フェレンツ死す
- 1737 イブラーヒーム・ミュテフェツリカ、キエフのパラティノスのもとに派遣される
- 1738 イブラーヒーム・ミュテフェツリカ、オルソヴァ要塞に降伏を勧告
- 1739 オスマン帝国、オーストリア帝国及びロシア帝国と交戦。ベオグラード条約によりベオグラード奪回
- 1741 ミュテフェツリカ版『ラーシド史』刊行
- 1742 ミュテフェツリカ版『シュールの辞書』刊行。ミュテフェツリカ生前の最後の刊行物となる
- 1743 イブラーヒーム・ミュテフェツリカ、外交交渉のためダゲスタンに派遣される
- 1745 イブラーヒーム・ミュテフェツリカ、イスタンブルで死去。享年 71 歳と伝えられる
- 1746 イブラーヒーム・ミュテフェツリカの娘婿カーディー・イブラーヒーム

- とカーディー・アフメット、イスタンブルに印刷所を開設するが（～1755）、結局何も出版せずに終わる
- 1756 イブラーヒーム・ミュテフェツリカの娘婿カーディー・イブラーヒーム（キュチュック・ミュテフェツリカ）が、再度スルタンの許可を得て印刷所を再開、『ヴァーנקリーの辞書』第2版を刊行
- 1783 ベイリクチ・ラーシトとヴァカニユヴィス・ワースフがミュテフェツリカ印刷所を再開
- 1784 『サーミー、シャキール、スプヒーの歴史』刊行
- 1796 ベイリクチ・ラーシトがイスタンブルに印刷所開設
- 1798 ナポレオンのエジプト侵入。金属活字によるアラビア語印刷物の導入
- 1802 アブドゥル・ラフマン・エフェンディ、ウスキュダル印刷所開設
- 1821 エジプトでブーラーク印刷所開設
- 1831 イスタンブルでタクヴィミ・ヴェカイ印刷所開設。テヘランで西アジア初の活字版コーラン刊行
- 1924 アラブ世界で初の活字版『コーラン』、エジプトで刊行

参考文献

○ 原典史料

- Celebîzâde Asım. Tarih-i Celebîzâde Asım. İstanbul, 1741; İstanbul, 1865.
Müteferrika, İbrâhîm. Milletlerin düzeninde ilmi usuller (Usul'ul-hikem fi nizam'ülümem). Sadeleştiren Omer Okutan. İstanbul, 1990.
Necatioglu, Halil. Matbaacı İbrahim-i Muteferrika ve Risale-i İslamiye adlı eserinin tenkidli metni. Ankara, 1982.
Rashid Efendi. Tarih-i Rashid. İstanbul, 1741. 3 v. ; İstanbul, 1865. 5v.

○ 日本語文献

- 新井政美『トルコ近現代史—イスラム国家から国民国家へ—』みすず書房 2001
新井政美『オスマン VS. ヨーロッパ』講談社 2002
コーシュ・カーロイ著/田代文雄監訳、奥山裕之・山本明代訳『トランシルヴァニア—その歴史と文化』恒文社 1991
白岩一彦『東南欧諸国の宗教と民族問題』アジア・オセアニア研究所 1992
白岩一彦「イスラム教国における宗教財産制度（ワクフ）」『レファレンス』523号（1994. 8）、38 - 76 頁
鈴木董『オスマン帝国』講談社 1992
鈴木董「オスマン帝国とフランス革命—イスラム世界と近代西欧世界の同代的接触のひとこま—」『フランス革命と周辺国家』リポート 1992、59 - 106 頁
高宮利行、原田範行『本と人の歴史事典』柏書房 1997
照井菜穂子「イブラーヒーム・ミュテフェリカー著作本とその書誌—」『Gaidai biblioteka』166号（2004）、19 頁
永田雄三、羽田正『成熟のイスラーム社会』中央公論社 1998（世界の歴史 15）
永田諒一『宗教改革の真実—カトリックとプロテスタントの社会史—』講談社 2004
バーナード・ルイス著、白須英子訳『イスラーム世界の二千年—文明の十

- 字路中東前史—』草思社 2001
- アラン・パーマー著、白須英子訳『オスマン帝国衰亡史』中央公論社
1998
- 林佳世子『オスマン帝国の時代』山川出版社 2003（初刷 1997）
- ブリュノ・ブラセル著、荒俣宏監修『本の歴史』創元社 1998（知の再発
見双書 80）
- 三橋富治男『トルコの歴史』紀伊国屋書店 1970（初刷 1964）

○ 外国語文献

- Alkan, A. Turan. “Kuş kafesi sebiller,” *Osmanlı Ansiklopedisi*, v. 5, Istanbul, 1996, pp. 20-27.
- Franz Babinger; *Schriftenverzeichnis*. Als Handschrift gedruckt im Herbst 1938. Würzburg, 1938.
- Balazs, Mihaly and Gizella Keseru, eds. *Gyorgy Enyedi and Central European Unitarianism in the 16–17th centuries*. Budapest, c2000.
- Bayrak, M. Orhan. “Osmanlı tarihi” yazarları (Biyografi ve bibliografyası) 1982.
- Berkes, Niyazi. “İbrâhîm Müteferrika,” *Encyclopedia of Islam*, new ed., vol. III, Leiden, 1971, pp. 996-998.
- Carleson, Edvard. *Ibrahim Muteferrika Basımevi ve bastığı ilk eserler*. Ed. Mustafa Akbulut. Ankara, 1979.
- Hegy, Klára. *The Ottoman Empire in Europe*. Budapest, 1986.
- Het Oosters Antiquarium. *Catalogue No. 614: Rainbow*, Leiden, 1997; *Catalogue No. 651: Islamic Legacy*, Leiden, 2005.
- “İbrahim Müteferrika,” *Türk Ansiklopedisi*, v. 19, Ankara, 1971, pp.509-510.
- Istoricheskaya literatura na turetskom yazıke khranyashchayasya v bibliotekakh Leningrada; svodnyı annotirovannyı katalog, 1729-1963*. Sostavil A. Kh. Rafikov. Leningrad, 1968.
- Kabacı, Alpay. *Türk kitap tarihi*. 2. baskı. Istanbul, 1989.
- Ketterman, Günter. *Atlas zur Geschichte des Islam*. Darmstadt, 2001.
- Kissling, H. J., “Das Osmanische Reich bis 1774,” *Handbuch der*

- Orientalistik, Abt. I, Band VI: Geschichte der Islamischen Länder, Abschnitt 3: Neuzeit, Leiden-Köln, 1959, pp. 3-46.
- Kun, T. Halasi. "İbrâhim Müteferrika," İslâm Ansiklopedisi, v. 52, İstanbul, 1968, pp.896-900.
- Kut, Günay Alpay. "Matba'a (2. In Turkey) ," The Encyclopedia of Islam, New Edition, vol. 6, Leiden, 1991, pp.799-803.
- Meier, M. S., "Krizis osmanskikh imperskikh poryadkov; menyayushchiesya otnosheniya tsentra i periferii v XVIII v.," Osmanskaya imperiya; gosudarstvennaya vlast' i sotsial'no-politicheskaya struktura, Moskva, 1980, pp. 66-80.
- Orel, Fuat Sürreya. Türk basın tarihi, 1728-1922, 1831-1922. Ankara, [1967]
- Rafikov, A. Kh. Ocherki istorii knigopachataniya v Turtsii. Leningrad, 1973.
- Thorpe, James. The Gutenberg Bible; landmark in learning. 2d ed. San Marino, CA, 1999 (1st ed. 1975)
- Watson, William J., "İbrâhim Müteferrika and Turkish Incunabula," Journal of the American Oriental Society, July-September 1968, pp. 435-441.
- Wilber, Earl Morse. A history of Unitarianism in Transylvania, England and America. Cambridge, Mass., 1952.

付記

本稿脱稿後に、本稿で紹介したミュテフェツリカ版全点（ミュテフェツリカ版 17 点及びミュテフェツリカ死後に刊行の 7 点）がマイクロフィッシュ形態で刊行されたことを知った。『ナウカ洋書案内』A549（2005 年 1 月）、164 頁によると、このマイクロフィッシュ・セットは、オランダの IDC が刊行したもので、その詳細は次の通りである。

"Early Ottoman Printing: The Müteferrika Press; Turkish Incunabula from the Müteferrika Press, 1729-1794. (IDC/H) 23titles. Number of fiche: 237. 104x 148mm. Positive Silver Halide."

このマイクロフィッシュ・セットに収められたミュテフェツリカ版の点数は、本稿より 1 点少ないが、これは、『チェレビー・ザーデ史』を『ラーシド史』の続編と見なし、両者合わせて 1 タイトルとしたためかも知れない。いず

れにしても、このような形でミュテフェツリカ版が身近に見られるようになることは、図書館にとっても研究者にとっても朗報であろう。

(しらいわ かずひこ 参考企画課)